



座談会

能登半島地震 復興を加速させたのは 地域の絆でした （石川県輪島市門前町道下（とうげ） 復興への取り組み） 地区における



平成19年3月25日午前9時42分
本県観測史上最大級マグニチュード6.9、
震度6強の地震

平成19年3月25日午前9時42分に発生した能登半島地震は、門前町道下（とうげ）地区にも甚大な被害をもたらしました。300人が避難する市内最大の避難場所となった諸岡（もろおか）公民館で、被災者とともに過ごされたお二人に復興までの様子をお聞きしました。



輪島市門前町道下地区位置図

【山本】お二人がお住まいの門前町道下地区について紹介して下さい。

【田辺】門前町は平成18年2月に隣の輪島市と合併しました。私達の住む道下地区は、八ヶ川下流に沿う平坦地にある農村地域で、ほとんどが兼業農家です。

【山本】震災直後の様子は、いかがでしたか？

【田辺】私は車を運転していました。電線が急に揺れ始め、たまたまではないと感じました。道路が寸断された中、まず職場に駆けつけ、職員・生徒の安否・避難状況を報告した後、やっとのことで自宅に帰りました。辛うじて立っている我が家は傾き、屋内は散乱、その状態を見た時、声が出なかったのを覚えています。

【山崎】私は自宅の2階にいたのですが、最初ドンと突き上げがあり、隣家とぶつかり合いました。最初は何が起こったのかわかりませんでした。家はなんとか立っていましたが、柱や窓は弓のように折れ曲がり全壊でした。家財は散乱し、階段も飛んでいたの、ロープで2階から降りるのがやっとでした。公民館主事を務めていたので、余震が続いていましたが、公民館が避難



山崎 道子さん



田辺 清さん

【出席者】
田辺 清氏
（輪島市立元諸岡公民館長 / 前道下総区長）
山崎 道子氏
（輪島市立元諸岡公民館主事）
山本 司
（(公財)えひめ地域政策研究センター所長）

所となっていることを思い出し、鍵を持って大急ぎで行きました。



道下地区の被災状況

【山本】震災直後、地区住民は、いかがでしたか？

【田辺】津波警報発令後から、高台にある指定避難所（道下農村公園）へ各自避難しました。町内別プラカードの下、人員や安否の点呼を行いました。当日は気温が低く、高齢者・病弱者・体調不調者には厳しい状況だったので、町内区長・消防分団員・有志らが自発的にテントを張り、毛布を用意するなど、公民館へ移動するまでの対応をいたしました。

また、消防分団員の方による自主的な

地区の見回りと避難の呼び掛け、民生委員の方々による要介護者マップによる見守り、避難介助も行い、日頃の地道な取り組みが発揮できました。

【山本】避難場所となった諸岡公民館の様子は、いかがでしたか？

【田辺】道下農村公園から昼過ぎに公民館へ移動しました。高齢者の方は和室で休んでいただき、幼い子供さんの家族は近くの保育所に入っていたきました。

そして公民館では、食事、トイレ、部屋割りなど、大勢が生活するのに必要な事柄について、町内区長・館長・主事・地元の市職員・消防分団員・婦人会や有志の方で協力し合いながら、避難に必要な準備を速やかに行いました。

そうこうしているうちに、その日のうちに日赤スタツプが来られ、翌日からは多くのボランティアの皆さんの皆さんも駆けつけてくれ、被災した我々を献身的に支えてくれました。

【山本】公民館での最大300人の避難生活について、混乱はなかったですか？

【田辺】余震の続く不安な中、多くの人で



被災直後の避難者の様子(諸岡公民館)

混雑する状況であったのですが、田舎ゆえにお互い顔見知り・気心が知れていたことで感情的な混乱はなく、むしろ譲り合い、遠慮しながら過ごせましたが、日が経てばさまざまな課題も必然的に出てきました。

【山本】お聞きする限りでは大きな混乱もなかったような感じがしますね？

【山崎】震災発生の前年10月に輪島市主催の地区住民参加の防災訓練があり、町内別プラカードの用意、人員掌握の仕方、高齢者・要援護者の事前の把握などについて事前に訓練できていたことが活かされたのではないかと思います。

また、震災当日に公民館では、持ち寄った食材やスーパーさんから提供のあった食材で婦人会の炊き出しがすぐ始まり、地域の絆の強さを改めて感じました。

水タンクとか仮設トイレを「早く作らんか！」と言った人がいたので、皆が動いてすぐに設置できたのだと思います。安否確認でも分団長の方が火の用心とともに、家の中の確認をしたそうです。緊急時には、分団長のようなリーダーシップは必要だとつくづく感じますね。

【山本】公民館長、そして主事さんとして大変でしたね。

【山崎】あの頃は休めなかったですね。交代で休んだり、公民館の床で寝転がったりして休むのが精一杯でした。しかし、同じ被災者であった市職員の方々も公民館で寝泊まりして、一緒に対応してくれ心

強かったです。

【山本】 行政への要望は？

【田辺】 住民には復興を進めるための情報が必要で。たとえば、罹災証明書とはどのようなもので、被災者の家屋の罹災段階に応じてどのような支援・補助がいただけるかなど、粗方わかっているならば被災者は再建を考えやすかったと思います。

私のところは農家が多く、母屋の他、蔵・作業場など所有している家がほとんどであり、大規模半壊、全壊の場合は、蔵・作業場も無償で取り壊してくれたのは助かりました。

被災状況も的確に把握されれば、田畑、農道、水路などの復旧はスムーズにいくと思います。

【山本】 あらためて避難生活を思い出されていかがですか？

【田辺】 震災発生4日後の3月29日、町内区長による連絡会を立ち上げ、市からの情報連絡、地区内の要望集約、避難者及び自宅待機者の健康状態・体調などの集約・報告などを4月17日まで行いましたが、多種多様な情報、各部署別の各種報告があり、ご高齢の方々が多い地区では、その対応に難儀しました。

そして受けた情報を漏れなく地区住民に周知すること、特に自宅で後片付けをしている方への周知が難しかった記憶があります。

また、高齢の方、車のない方々にとって、罹災証明、各支援事業の申請などに総合

支所までいかなければならない大変さと不便さがありました。

さらに、避難所での衛生管理、食事管理、避難者の健康管理などは行政の支援・対応が不可欠ですが、自宅暮らしの方もおり、状況把握は難しかったです。

【山崎】 ボランティアの炊き出しがあり、公民館へ避難している方の分は用意していただけるのですが、その情報が入り自宅避難者の方が公民館に来た時に食べられなかったということが多くありました。

公民館など公の施設に避難している方だけが避難者ではないということを理解する必要があります。



被災直後に始まった炊き出しの様子(諸岡公民館)

【山本】 震災発生から10年が過ぎましたが、被災者からみる支援の在り方とはどのようなことでしょうか？

【山崎】 震災発生から1カ月半後の5月には150戸の仮設住宅が建設され、そこで最大2年間避難生活された方がいらつしゃいますが、ようやく公民館の避難所から移ることができ、手足を自由に伸ばすことができると多くの方は実感していました。

仮設住宅での生活は個人の生活となるため、あまり他人が立ち入れないところがありますので、物質的支援も大事ですが、むしろ被災地支援はあくまでも自立支援なので、被災者の状況を見守りながら支援の在り方を変えて行くことが大事だと思います。

【山本】 各地で避難生活を余儀なくされている方々が多くおられますが、今改めてご覧になりどのように感じますか？

【田辺】 当地区は、公民館での避難生活は大変なことも多々ありましたが、自宅ですら休めることもできませんでした。今回の熊本地震での避難生活では、体育館の他、テントや車中で過ごしている方を多く見かけました。ご高齢の方やペットのことなど、周りへの配慮かとも思ったりしますが、避難された方々の気持ちは痛いほどわかります。

【山本】 震災の経験はどのように生かされていますか？

【田辺】 通常の避難・消火・炊き出し訓



座談会の様子(諸岡公民館)

右:センター 山本 司

練等とは高齢の方々が多く、常時実施することは難しいので、防災・減災意識を維持するという一方で、簡単なアンケート調査を全所帯対象に行い、その結果を町内区長間で共有し、防災・減災の基調とする取り組みを行いました。

また、被災経験、意識を薄めない様にするために、「災害発生時あなたはどのように避難しますか?歩きですか?」など「避難カルテ」の調査結果を町内会でまとめました。カルテを作ることが目的ではなく、避難について町内区長と住民が話し合いをしながら意思疎通を良好にするためのものです。

【山本】四国でも近い将来の大規模震災が予想されますが、地域が行うことは?

【田辺】よく話題となる自主防災組織の編成は難しいかと思いますが、組織ありきではなく、実働的組織であればある程度、被災直後の安否確認や地域の減災、防災の先頭に立てる組織になれると思います。

そして、実例はあまりありませんが、実際に避難生活訓練を行ってみるべきではないでしょうか?日常当たり前に手に入っている電気、ガス、食材などの物資が手元にないとして避難訓練をしてみると、備えておくべき物資、やるべき仕事が見えてくると思います。

そして、避難生活訓練を他人事と感じたり、おっくうだという意識の課題も多くあるかと思えます。日頃から防災に対する意識を高め、そして意識を維持する活動が大事なことだと思います。

人口の多い都会では田舎と異なり、一朝一夕にはいかに厳しい状況があり、悩みも多いことかと思えます。

【山本】震災は地区に何を残しましたか?

【山崎】今でも家屋跡となった更地を見るたびに被災したことを実感します。当時余震が続く不安な日々を過ごす私達をボランティア、医療関係者の方々が献身的に支えていただきました。

支えてくれる方々に少しでも応えるためにも、まずは避難者が元気になり、近所が助け合うことの大切さを教えてくれ

たと思っています。

【田辺】被災から約10年過ぎた今、空き家や更地を目のあたりにすると、何年過ぎようとも被災の歳月は忘れられませんが、改めて地区の良さや課題を見ることができたのも、この復興までの歳月でした。

また、改めて支えていただいた方々に少しでも報いるため、地区、住民が元気になり互いの絆を大切にしながら、これからも手を携え頑張っていかなければならないことを、静かな公民館を見るたびに思います。



田辺氏、山崎氏(避難者とともに過ごした一室で)

以上
*文中の資料などは田辺氏提供